

世界が注目するプリマドンナ
ソプラノ

横山恵子

～アリア名曲集を歌う～

共演 リチャード・ブルンナー (テノール)

▪ 管弦楽 / 倉敷管弦楽団 ▪ 指揮 / 菊池 東



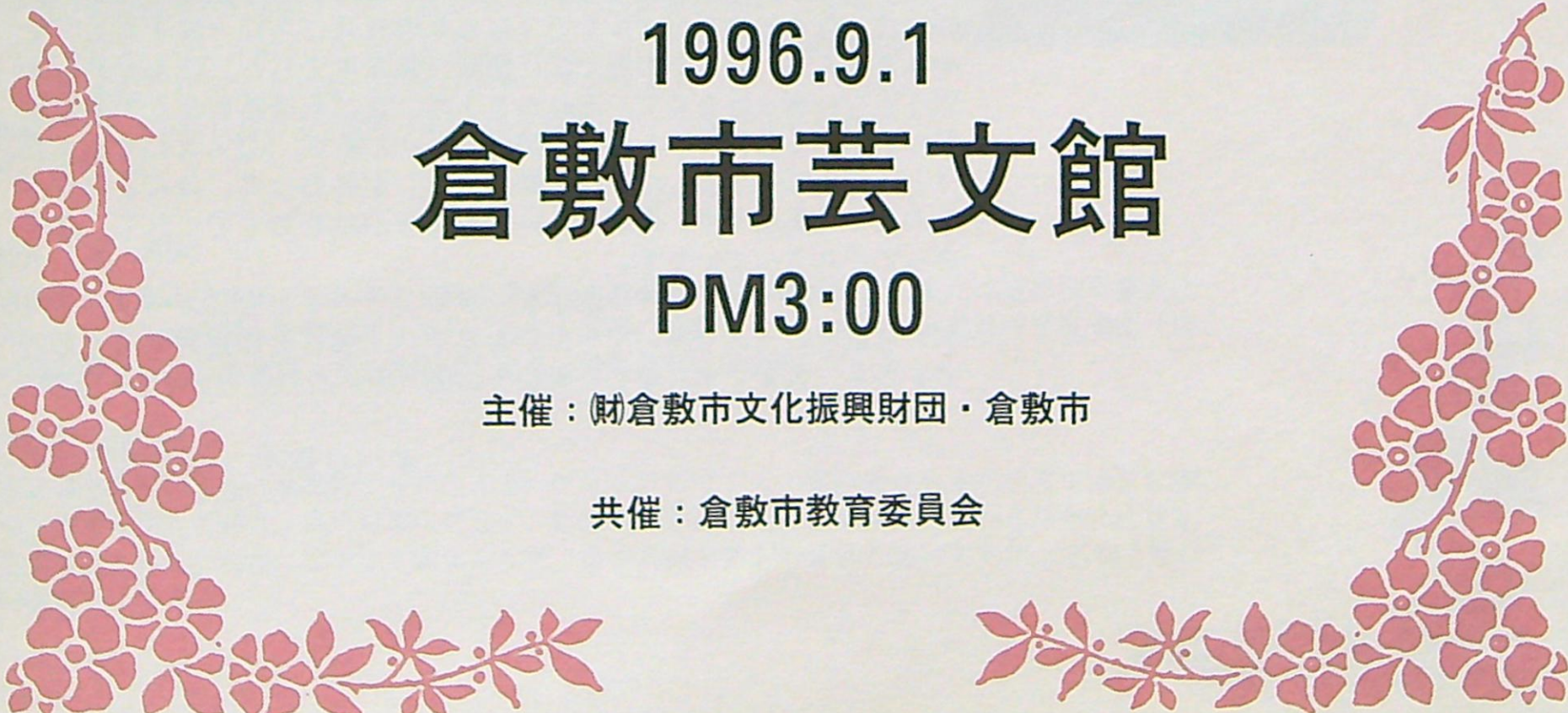
1996.9.1

倉敷市芸文館

PM3:00

主催：(財)倉敷市文化振興財団・倉敷市

共催：倉敷市教育委員会





歌うことって、すばらしい！

倉敷に帰ってくると高校時代をはじめ旧友たちが声をかけてくれます。山陽女子高等学校音楽科で過ごした高校生活は、入学から卒業まで、音楽科の30人だけが姉妹のように行動をとりにしたので、いろいろな結びつきがより深いのかも知れません。あのころを思い起こしてみると、“若さ”と“行動力”に溢れていたと思います。毎朝7時に家を出て岡山まで、よく続いたものだといながら感心しています。当然そのころは楽しいだけの毎日で、始めからオペラ歌手を目指していたわけではありませんでした。宝塚なんかいいかなあと漠然と思っていた程度。舞台に立って歌ってみたいという希望はあっても、夢みたいなものだったのでしょか。

勿論オペラなんて見たこともない。その後、東京音楽大学に入りましたが、ずいぶん経ってからオフエンバックのオペレッタ「天国と地獄」というのを見たのが初めてです。オペラというものはこんなものなんだと認識したのもそのころだったように思います。アリアの練習をしてもそれがオペラのなかで、どういう役割を担っているのか考えたこともなかったと言ったほうが正しいと思います。正直なところ、自分のことを“オペラ歌手だ”と思えるようになったのは、ごくごく最近のことなのです。

東京で私が師匠と呼ぶオリヴェラ・ミリャコヴィッチに出会って、東京での仕事をしながらウィーンに2カ月とか3カ月とか往復するようになったんです。住むところも、なにがなんでもウィーンと決めたくわけでもなく、憧れて行ったわけでもなくて、師匠がそこにいるからという、巡り合わせみたいなものです。本人はゆっくり構えているのに周囲のかたが引っ張りあげてくださって、いつもいい方向に動いて行くのです。早く上手になりたいとか、早くデビューしたいとか、早く有名になりたいとか思ったことはありませんでした。いろんな出会いなどがすべて良い方向に動いて、私を支えてくれていたとしか、いいようがありません。

1992年、オーストリア・ウィーン近郊のサントベルテン市に、姉妹都市の縁組をしている倉敷市から訪問団がおいでになり、倉敷の前市長(故)渡邊行雄さんがいらして、その席で私が歌ったんです。旅の疲れもおありだったでしょうに、渡邊さんは真ん中でじっと真面目なお顔で聴いてくださっていたのを思い出します。後でお話をさせていただいた時も優しい目で、真剣に聞いてくださいました。

人って思い掛けぬところで出会うものですね。小澤征爾さんとの出会いは、94年ザルツブルクで「96年の5月ごろに“蝶々夫人”をやりませんか」ってその場で実に簡単に決まりました。ほんとかなと思うくらいあっけなくて、それから1年、なにも連絡がなくて半信半疑でいるところに、いろんな書類がドカッと来て、「ほんとにやるんだ！」って気になりました。今「蝶々夫人」が終わって、ほんとにやったのねって実感です。素晴らしい歌と人々が私を育ててくれて、私を守ってくださっています。

今日は、同門のテノール歌手R・ブルンナーとともにオペラ・アリアの名曲をたっぷり聞いていただきます。1曲ごとに役柄が違うわけですから、大変です。楽しい舞台をお楽しみいただきしたいと思います。

オペラ歌手 横山恵子(談)



～ プロフィール ～

横山恵子 (ソプラノ)

倉敷出身

倉敷市立帯江小学校、多津美中学校から山陽女子高等学校音楽科を経て、東京音楽大学声楽専攻卒業ならびに同大学研究科を修了、更に、二期会オペラスタジオ研究生、洗足学園大学付属オペラ研究所をそれぞれ修了。その後、本格的オペラ活動に入り、モーツァルトの主要なオペラ作品やフンパーディンク「ヘンゼルとグレーテル」の魔女役で好評を博す。

1992年オーストリア・ウィーンへ留学、同地に居を構えるオリヴェラ・ミリャコヴィッチ女史（ウィーン国立歌劇場専属で、オーストリア宮廷歌手の称号を持つ）に師事、早くも同年、ドイツのバイエルン州立コーブルク歌劇場に認められ、ヴェルディ「ドン・カルロ」のエリザベッタ役でヨーロッパに華々しくデビューを飾る。

さらに1993年同歌劇場でのブッチーニ「マダム・バタフライ（蝶々夫人）」の主演に出演、その歌唱力と演技力が評判となり、ロンドンの権威ある評論誌「オペラ」誌上などで絶賛される。

1994年ウィーンとザルツブルクで国際的な新しい才能を模索中であった小澤征爾氏のオーディションを受け見事に合格、その天分を見いだされ、今年5月に日本公演された小澤征爾指揮・浅利慶太演出のブッチーニ「蝶々夫人」で、悲劇のヒロインを堂々と演じ、オペラ界の話題をさらった。

1995年よりドイツ・フライブルク市立歌劇場の専属歌手、二期会会員、洗足学園大学オペラ研究所特別研究員。

1996年以降も日本国内そしてヨーロッパで、オペラやコンサートへの出演が予定されている。



リチャード・ブルンナー (テノール)

アメリカ・オハイオ出身

州立レント大学修士課程を修了後、トロント大学オペラ科でルイ・キリコに学ぶ。さらにフィラデルフィアでジョン・アレクサンダーに師事し研鑽を積む。その後アメリカのさまざまな歌劇場でキャリアを積み、1989年パリでワーグナー「ラインの黄金」に出演する。以後、ベートーヴェン「フィデリオ」、チャイコフスキー「スペードの女王」や、オーストリアでのビゼー「カルメン」ドン・ホセ役そしてパイロイト祝祭の出演などが高く評価され、ヨーロッパへの地盤を築いた。

1991年からは、ウィーン国立歌劇場の歌手として契約、現在までさまざまな演目で250回以上出演を重ね好評を得ている。

日本へはウィーン国立歌劇場のヨハン・シュトラウス「こうもり」やハンブルク国立歌劇場のワーグナー「タンホイザー」などの公演で来日している。

クーベリック、バレンボイム、スラトキン、ドホナーニなど著名な指揮者との共演や本年リリースされる「オペレッタ・アリア集」、ベートーヴェン「第九」ソリストのCDなどで華々しい活躍を展開している期待されるテノールの人である。



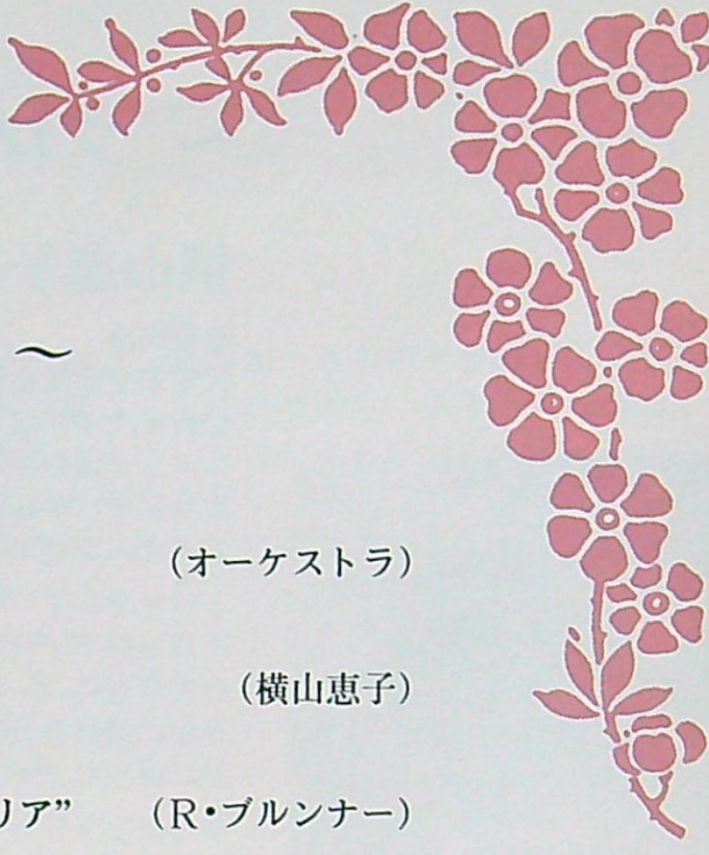

菊池 東 (指揮)

玉島出身。広島大学卒業。在学中より同大学室内合奏団や広島交響楽団員、また東京都民交響楽団やモーツァルト室内管弦楽団のコンマスとしても活躍。昭和49年、仲間と倉敷室内管弦楽団（現在の倉敷管弦楽団）を創設、常任指揮者となり、倉敷を中心に活動している。

倉敷管弦楽団

昭和49年倉敷に誕生。全国のアマチュアオーケストラの中でも、室内楽からオペラまで非常に幅広い活動を展開しており、その功績に対して、昭和57年岡山県文化功労賞、昭和60年には倉敷文化連盟賞を受賞。現在、ますます意気盛んで、合言葉は「美しい音色と良いアンサンブルで質の高い演奏を」である。





～ プログラム ～

1. モーツァルト : オペラ「フィガロの結婚」より
序曲 (オーケストラ)
 2. モーツァルト : オペラ「フィガロの結婚」より
伯爵夫人のアリア “何処へ” (横山恵子)
 3. モーツァルト : オペラ「魔笛」より
タミーノのアリア “肖像のアリア” (R・ブルンナー)
 4. ヴェルディ : オペラ「アイダ」より
アイダのアリア “勝ちて帰れ” (横山恵子)
 5. ヴェルディ : オペラ「運命の力」より
序曲 (オーケストラ)
 6. ヴェルディ : オペラ「椿姫」より
デュエット “乾杯の歌” (横山恵子/R・ブルンナー)
- ～ 休憩 ～
7. ビゼー : オペラ「カルメン」より
第2幕の間奏曲 (オーケストラ)
 8. ドニゼッティ : オペラ「愛の妙薬」より
モリーノのアリア “人知れぬ涙” (R・ブルンナー)
 9. プッチーニ : オペラ「ラ・ボエーム」より
ロドルフォのアリア “冷たい手” (R・ブルンナー)
ミミのアリア “私の名はミミ” (横山恵子)
 10. マスカーニ : オペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」より
間奏曲 (オーケストラ)
 11. プッチーニ : オペラ「トスカ」より
カヴァラドッシのアリア “星も光りぬ” (R・ブルンナー)
トスカのアリア “歌に生き、恋に生き” (横山恵子)

ソプラノ／横山恵子
テノール／リチャード・ブルンナー
指揮／菊池 東
管弦楽／倉敷管弦楽団

※「アイダ」「ラ・ボエーム」の使用楽譜は、トヨタ・ミュージックライブラリーより借用させて頂きました。
ご好意に厚く御礼申し上げます。

